

9. 珠洲の人と牛

山 田 篤 史

1. はじめに
2. 牛はどのように飼われ、人々にとってどのような存在であったか
3. 酪農と八ヶ山
4. 考察
5. おわりに

1. はじめに

今回、一週間にわたる若山町三郷地区での聞き取り調査（8月の本調査）を通して、私は「牛」というテーマに関心を持った。調査中、この地区に住む方々のお話を聞いていると、多くの家庭において、昔は牛を飼っていたということが分かってきた。だが、いつからか牛を各家庭で飼うことはなくなってしまい、今では一般の家庭で見ることはまずないと言えよう。そういった現状の中、私は八ヶ山という場所で、若山の人たちの手により酪農が営まれているということを知った。のちに、実際にその場所へ行って現場を見てみることはできたのだが、私はその緑豊かで広大な土地に感動した。その理由は、私が牧場をじかに見たことがそれまでなかったということも一つあると思う。しかしそれ以上に、昔は各農家で飼われていた牛が、今では酪農という形で山奥の牧場で飼われるようになったという牛の飼われ方の変化、そしてなにより、このような山奥に牧場を切り開いた人々の姿にロマンを感じたからである。このことから私は、若山を中心とした牛の飼われ方をテーマにすることとした。

本章では、まず歴史的な視点で牛の飼われ方の変遷を記述し、その次に現在八ヶ山で酪農をしておられる方のお話やその現状を記述する。我々が毎日のように口にする牛乳や乳製品、牛肉。身近なようで、あまり知らない牛のことをあらためて読者が意識するきっかけになれば、と思う次第である。

2. 牛はどのように飼われ、人々にとってどのような存在であったか

調査中、「役牛」や「黒牛」という言葉をよく耳にすることがあった。また、お訪ねした先で「昔、お家で牛を飼っていましたか」と聞けば、たいいてい飼っていたという答えが返ってきて、飼っていた当時のことについていろいろと聞くことができた。話者がもつ牛の思い出が、子どもの頃に世話をしたことであつたり、酪農に奮闘したことであつたりと様々なものであることを面白く感じた。このことから、いかに若山地区の人々にとって牛が、いて当たり前の存在、つまり、なくてはならない存在であったかということがうかがえるであろう。しかし、今となつては牛を飼っている家は大変少なくなってしまったということを、調査を通して実感した。時代とともに牛の数は減り、一般家庭ではまず飼われなくなってしまった。この節では、珠洲市の人々がどのように牛を利用してきたかということとあわせて、現代のように牛を飼わなくなるようになった流れを記していく。

2.1 時代の流れで見る、珠洲市における牛

以下の記述は主に『珠洲市史第6巻』の「畜産業」に依拠するが、聞き取り調査のデータも用いている。

珠洲市は昔から牛と馬の飼育が盛んな地であつた。古くには、幕藩時代において第3代加藩主前田利常が製塩業を奨励し、その製塩のための薪燃料の運搬用として牛馬が役畜として利用されるようになったことで、珠洲市の畜産の歴史は始まる。このことから、当初牛馬は肉用というよりは役牛馬として飼育されることが主であつたと言える。ところが、この製塩業は明治に入ることまでは盛んだったものの、次第に衰退していき、それに伴い運搬用としての牛馬の利用価値も減退していった。

明治40(1907)年ころから、馬よりも粗食に耐え、飼いやすい役肉兼用牛が珠洲地方で飼育に適していることが認められ、県が産牛の改良繁殖を図ることとなった。

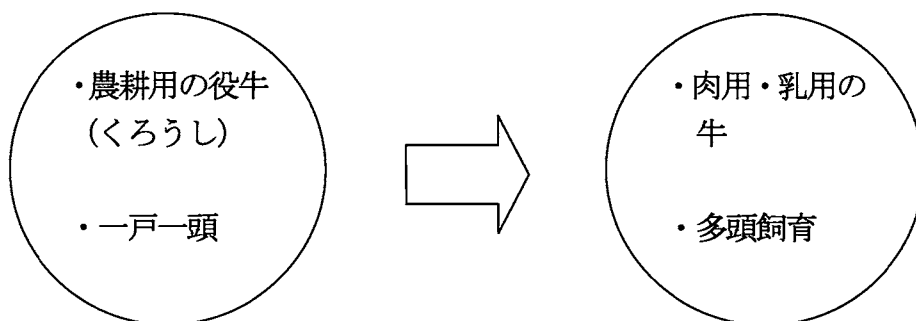
さらに大正に入ると、馬が軍馬として徴発されたこと、牛は女・子どもにも扱いやすく、肉用として販売も可能であることから、農家は馬から和牛を飼うようにシフトしていった。

農家には、牛がいて当たり前という昭和前半。一戸一頭という飼養観念が定着していた。若山においては、役牛として牛を飼育する農家だけでなく、牛の数を増やして酪農を始めた家庭もあり、Aさん(男性、60代)は、かつては若山でも14、5軒ほどの酪農家があつたことを覚えていらっしゃる。

しかし、昭和38(1963)年以降、和牛の急激な減少が始まる。この主な原因としては以下のようことが挙げられる。耕運機が各農家に普及し始め、農耕用としての和牛の価値が薄れていっ

たこと、化学肥料の普及で牛の採肥が不必要となったこと、仔牛の販売価格が安くなったことなどである。こうして役牛は、長い歴史を背にその影をひそめていくこととなる。なかには役牛を肉牛として飼うようにして、現在まで畜産を続けている家庭もあったが、それはまれな例である。加えて、昭和 36（1961）年から全国で実施され始めた農業構造改善事業が、珠洲市でも実施される。このことにより、一戸一頭という飼養形態から、多頭飼育へと牛の飼われ方が転換される。昭和 37~39（1962~1964）年に若山に市営の放牧場が建設されたことがその一つの事例であると言えよう。こういった背景により、家庭における牛飼育数の減少傾向がはじまることとなり、B さん（男性、80 代）によると若山では昭和 50（1975）年ごろから役牛を飼う家庭はほとんどなくなってしまったということであった。かくして役牛はその役目を終えることとなり、これ以降の牛の飼育目的は牛肉・牛乳の生産が主になる。

図1 牛の飼われ方の変化



出所：筆者作成

以上、珠洲市における牛（特に役牛）の歴史をおおまかに記してきた。ここで最後にでてきた農業構造改善事業について少し触れておくとする。農業構造改善事業とは、農業の生産性を向上し、農業従事者の所得を増大し、農業の発展と農業従事者の地位の向上を図るという「農業の近代化」をうたって昭和 36（1961）年から実施された国の計画である（全国農業構造改善協会 1967: 1）。この計画の一環として、肉用牛も乳用牛もその飼育が専門化されるようになり、これによって飼育農家数が激減することとなった。ところが、この国の計画は地方によって実施される時期にかなりばらつきがあったようである。A さんによると、石川では昭和 45（1970）年からの実施であり、さらに珠洲市に至っては県内でも最後の方だったそうである。

2.2 役牛、黒牛、能登牛

ここで、冒頭で著した「役牛」という言葉の意味について少し触れておきたい。文字からも分

かるように、役に立つ牛である。具体的には、田の耕作など、人にとって大変な力仕事をしてくれる牛のことで、機械が導入される前の農家にとっては必要不可欠な存在であった。

また、「役牛」とは別に「黒牛」という言葉もあるが、これらは互いに異なった牛を意味しない。各農家で役牛として飼われていた牛は、ほとんどが黒色の牛であったそうで、このことから、一般的に牛を指す言葉としては黒牛が用いられていたようである。実際に、お話を伺った方々は、黒牛という呼び名の方になじんでいるようで、こちらの方をよく使っていた。

一方で、「能登牛」といわれる牛が、古くから珠洲や鳳至などの奥能登で飼われていた。この牛は、体は小さいが、粗食に耐える強健でおとなしい牛である。脚力が強く、材木や木炭、稲の運搬に使用され、あまり改良されることもなく自然成育のまま飼育されていた。先ほど述べた、前田利常が利用した牛はこの能登牛である。しかし、現在能登牛と呼ばれる牛は、肉質・肉色などのすぐれた、兵庫や鳥取などから導入した牛がもととなっている黒毛和種のことで、石川県のブランド牛となっている。現在、石川県はブランドを広めようと、この能登牛の増産体制の充実に努めているところである。

2.3 仔牛の販売

農家は、仕事の手助けをしてくれる存在として牛を飼っていたが、同時に牛に子を産ませ、その仔牛を売るといった副業的な仕事も日常的にしていたようである。

Cさん（男性、60代）に聞いた話では、役牛はだいたいメスだったそうである。なぜなら、オスだと気性が荒く、力も強いいため、女性や子供には扱いづらいからである。そして、せっかくメスを飼っているのだから、仔牛を産ませ、売ればもうかるという発想に至るのは自然なことといえるかもしれない。

Dさん（男性、70代）は子どもの頃、家で飼っていた牛の世話を任されていた。それで仔牛を産ませては売っていたそうで、親に「高く売れたら、肉買ってやるぞ」と言われ、がんばって牛の世話（えさやりや散歩など）をしていたそうである。このように、おとなしい牛の面倒をみることは比較的簡単な仕事なので、子どもに任されることが多かったようである。

このような仔牛の販売に付随する形で、牛に種付けをする人工授精の仕事をしていたという方もいた。Bさんは、人工授精士として各農家に牛の精子を配る仕事の他にも、牛の病氣も診て回る仕事もしていた。また、人工授精を仕事とせずとも、人工授精士の資格を持つ農家の方も多かったようである。どの農家にも牛がいる、という時代を象徴するような事柄であるように感じる。

3. 酪農と八ヶ山

次に、現在の若山における牛の姿に目を向けてみる。これまで書いてきたように、珠洲市では主に役畜として飼われていた牛であったが、時代とともに肉用・乳用として飼われるように変化していく。この章の後半では乳用としての牛、つまり酪農のほうに焦点を絞って現在の牛の飼われ方を記していく。

3.1 乳用牛と肉用牛

まずは、昭和 45（1970）年から平成 21（2009）年までの乳用・肉用牛の飼育農家数と頭数を示すデータを見ていただきたい。

表 1 乳用牛の飼育農家数と頭数（単位：農家数＝戸、頭数＝頭）

	昭和 45 年 (1970)		昭和 55 年 (1980)		昭和 60 年 (1985)		平成 12 年 (2000)		平成 21 年 (2009)
	飼育農家 数	頭数	飼育農家 数	頭数	飼育農家 数	頭数	飼育農家 数	頭数	頭数
石川県合計	883	6510	293	7445	225	8281	98	5378	4470
珠洲市	62	408	32	682	27	713	14	534	
若山	25	128	8	173	5	182	5	158	-

（出所：農林水産省 農業センサスより）

表 2 肉用牛の飼育農家数と頭数（単位：農家数＝戸、頭数＝頭）

	昭和 45 年 (1970)		昭和 55 年 (1980)		昭和 60 年 (1985)		平成 12 年 (2000)		平成 21 年 (2009)
	飼育農家 数	頭数	飼育農家 数	頭数	飼育農家 数	頭数	飼育農家 数	頭数	頭数
石川県合計	1972	4154	396	4000	338	4833	105	2944	3130
珠洲市	467	807	99	739	95	984	17	614	
若山	178	295	35	118	38	150	3	17	

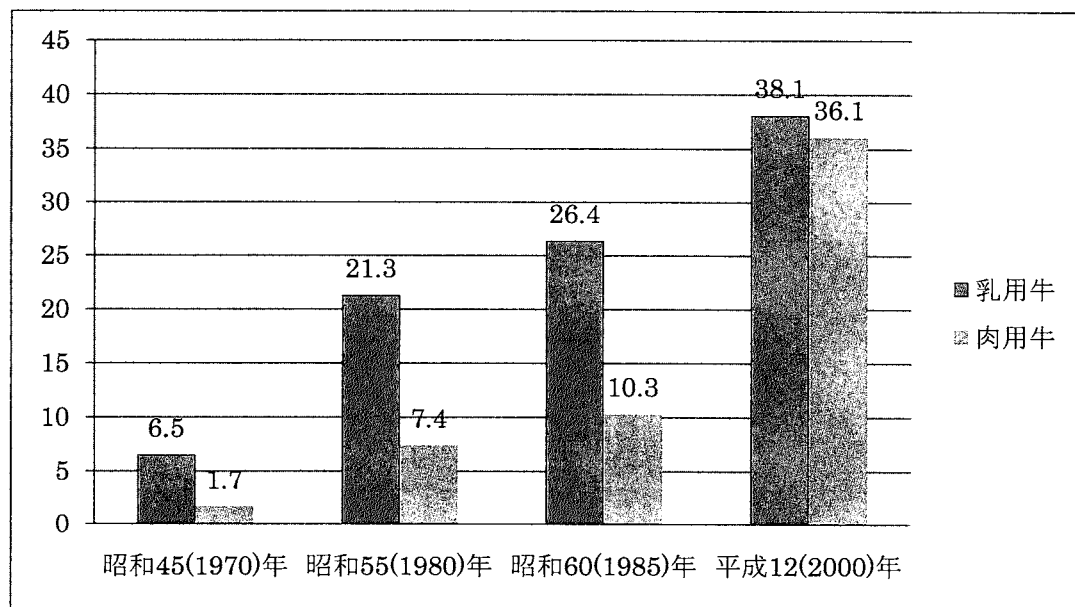
（出所：農林水産省 農業センサスより）

昭和 45（1970）年の肉用牛の飼育農家数を乳用牛と比較すると、その数がかかなり多いことが分かるが、これは農家が飼っていた牛を役肉兼用牛とみなすことによって出された数値であると考えられる。つまり役牛として牛を飼っていた農家も、この肉用牛飼育農家数に数えられているということである。

この表で最も注目すべきところは、昭和45（1970）年と55（1980）年の間で飼育農家数が乳用・肉用ともに激減しているということである。先にも書いたように、昭和45（1970）年頃から県で実施された農業構造改善事業に伴う多頭飼育と酪農専門化の推進、その成果を見て取れる部分である。それに加え昭和45（1970）年には、分散的経営活動から農協を中心とした農協酪農部が発足したことで、農家の統合が加速化したことも影響している。また肉用牛に関しては、農耕用機械の導入の時期とも重なることから、役牛離れの風潮も大きくこの減少傾向に関係していると言えるだろう。昭和55（1980）年以降においても、頭数というよりは飼育農家数の数値のほうがより顕著で一貫性を持った減少を示していることが分かる。補足になるが、Eさん（男性、50代）によると、現在（平成23〔2011〕年）の県の乳用牛飼育農家数は、ここ何年かで10件ほど減った結果、70件くらいになっているそうである。

この表をもとにして、一戸当たりの飼養頭数を算出したものが以下のグラフである。現在となつては、乳用も肉用も一戸で40頭ほどにもなる牛を飼うようになっており、昭和45（1970）年の数値と比べれば、その飼養形態が大きく変わったことが分かる。私が訪ねたハヶ山酪農場の各牛舎も、約40頭を収容できる大きさであった。

図2 石川県飼牛農家の一戸当たりの牛の飼養頭数（単位：頭）



（出所：農林水産省 農業センサスより）

3.2 ハケ山酪農場

調査中、昔家で酪農をしていたが畜産公害（家畜の多頭飼育にともなって発生する糞尿や臭気）が原因で辞めてしまったというFさん（女性、70代）とお話をした。1）酪農に関して質問を続けると、ハケ山において集団で酪農が営まれているということが分かった。後日、ハケ山で酪農をしているGさん（男性、60代）にアポイントを取り、数人で現地に向かった。かなり道に迷った。かすかに車の窓から流れ込む酪農場特有のにおいをひとつの頼りとして、それらしき道を祈るような気持ちで進んで



写真1 ハケ山の風景（筆者撮影：2011年）

いくと、それまで木々に囲まれてうっそうとしていた空間が一気に開けた。広大な草原といくつかの牛舎があったのでここが目的地であると分かった。そしてそこには、牛達を相手に汗を流している人たちの姿があった。

3.3 ハケ山酪農場の成り立ち

珠洲地方に初めて乳牛が導入されたのは明治31（1898）年であるが、牛乳の需要に限られた地域にしかなかったためにあまり発展はなかった。昭和29（1954）年に入り、新潟から4頭の成牛を導入したことを契機に本格的な酪農が始まる。その後、昭和35（1960）年に珠洲市酪農組合が結成され、さらに昭和45（1970）年に農協酪農部の結成によって分散的経営活動からの脱却が図られた。

昭和47（1972）年から乳牛の多頭飼育と酪農専門化を推進する第二次構造改善事業が若山と三崎で実施された。その翌年から、もともと珠洲市の土地であったハケ山に牛舎などの設備を設置する事業が農協を中心に進められ、昭和49（1974）年に完成する。その年に若山から5戸が入植し、ハケ山酪農場がスタートする。元農協職員であるFさんのご主人が、この事業の第一人者であって、そのためにたいへんな尽力をされたということをFさんからお聞きした。Aさんに聞いたところ、Fさんのご主人は情熱的で、ハケ山酪農場のリーダー的な存在であったようだ。現在では、そのうちの1戸に別の人が代わって入っているが、それ以外の牛舎は当時と変わらない人たちが担当している。ちなみに、それぞれがどの牛舎に入るかはあみだくじで決めたそうである（Aさん）。

珠洲市には、現在12、3件の酪農家がある（Aさん）ということなので、そのうちの5件がこのハケ山に存在することとなる。5件のうちの2件は牛舎の隣に自宅を構え、そこで暮らしているが、そのほかの牛舎はいわゆる「通い酪農」という形をとっている。「地理貧乏」という言葉を漏

らしたのは、八ヶ山で通い酪農をしているEさん（男性、50代）である。山の上にあるため、当然その分だけ輸送費や移動費がかかる。また、冬にもなれば平地よりも長い期間、多い雪に見舞われることとなり、作業の効率もおのずと下がる。そのように地理的な不便さや不利も八ヶ山には少なくない。Eさんはもともと八ヶ山でないところで酪農をしていたが、設備がそろっているということで、八ヶ山に移動した。

ここでひとつ、私が驚いた機械を紹介しようと思う。八ヶ山酪農場のところどころに一边が1mほどという巨大な白い立方体が並んで置かれている。若干丸みを帯びたそれは、巨大な奥歯のようにも見え、異様な光景であった。Gさんにその物体について尋ねると、牛のえさとなる牧草を白いラップのようなもので包み、雨などから守れるようにしているそうである。こういったことのできる機械があるおかげで、かなり楽になったということであった。

4. 考察

4.1 八ヶ山酪農場の声

次に、八ヶ山で酪農を営んでいる方々のお言葉を借りつつ、酪農の現状と展望について記述していく。私が直接会ってお話を聞いたのは5か所のうちの3つで、それぞれ3名である。

最初に訪れたのはGさんの牛舎。牛の生態や酪農に関する知識のほとんどない私たちには、わからないことや見たことのないものばかりで、Gさんには質問を浴びせてしまったが、Gさんは親切に答えてくださった。そのあと、AさんとEさんのもとを訪ねて、お話を伺った。

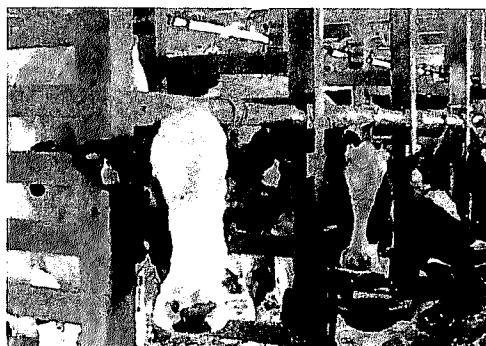


写真2 Gさんの所の牛（筆者撮影：2011）

八ヶ山酪農場には若山草地酪農組合という名の組合が存在している。八ヶ山酪農場のメンバーで構成されているものだ。だがEさんによると「名前だけが残っている」という状態らしい。昔はメンバーでよく話し合いの場を持っていたが、今では皆で集まることはなくなってしまったそうだ。「今は市や県が畜産に対する事業を行わなくなってしまった」と、Eさん。このように畜産に対する事業がなくなったことで、それに関して話し合いの場を持つ必要がなくなったと言える。また、メンバーの年齢が高齢化して、集まること自体が億劫になったということも原因である。今でも個人同士で話したりはしているそうだが、それでも八ヶ山酪農場全体での付き合いが希薄化し、各牛舎の独立傾向が強くなっているということは否めない状態であると言える。

そして、八ヶ山酪農場のメンバーが高齢化しているという現状もある。それは、後継者の見当

がついていないということも意味する。若者が農業をやりたいと言われる昨今、農業人口高齢化の減少は八ヶ山でもみられた。実際、Aさんは後継ぎがいないことを嘆いている様子で、冗談ながら「おまえは体がしっかりしてそうだから、大歓迎やぞ。その気があるなら、うちに来い」と、一緒に聞き取りをしていた私の仲間におっしゃっていた。あくまで冗談ではあったものの、Aさんが70歳をむかえる年齢であることも考えると、Aさんとしては切実な問題であるだろうと思う。

さらに、農家にとって切実な問題がある。AさんとEさんの二人がTPPについて言葉をもらしており、不安を感じている様子がうかがえた。平成23(2012)年現在、日本の農家が最も注目している動きの一つとしてTPP(環太平洋経済連携協定)の名前を挙げることができる。これは、アジア太平洋地域の国々による経済の自由化を目的とするものであり、もし日本が参加すれば、安い農作物が国内に流れ込み、日本の農業が危機に瀕する可能性がある。酪農においても例外なく、影響を受けることになるだろう。牛乳生産者として大きな不安要素であるTPPに日本が参加した場合、それがどう日本の農業を変えていくのか。今、日本の農家が抱えている緊張は計り知れない。「今の体制でやっていけるのか? 牧場がもつのか?」「日本の農業がどうなるかわからない」とEさんは言う。見通しの悪い先行きの中、漠然とした不安を抱いているという点は多くの農家に共通するところなのだろう。

4.2 日本の農業への提言―若者と農業―

八ヶ山酪農場でみられた農家の高齢化と担い手不足。これに対してどのような策を講じることができるだろうか。日本の農業という大きな枠組みまで視野を広げて考えてみる。

2012年1月29日付の朝日新聞に、日本の農業政策は農業への新規参入者に対して厳しいという読者の声が寄せられていた。これは、農業を始めようと奮起したが、新規参入の際の規制や障害の多さからやる気をそがれた息子をみて、その母親が投稿したものだ。就農人口の高齢化が叫ばれているのは、ここ近年に始まったことではない。それにも関わらず、今でも若者が就農しやすい環境が整っているとは言い難い。意欲ある若者をサポートする仕組みを打ち立てることは国や地方自治体の急務と言えるだろう。この新聞記事の例で言えば、新規参入者は農業委員会の許可取得や農地法の申請などのわずらわしい作業をこなす必要がある。この負担をできるだけ軽減させ、新規参入者に対してより柔軟で寛大な対応をすることが、自治体に求められる。

その他にも、農業の新規参入の最大のネックとなっているもののひとつが資金集めである。農家出身でない若者が就農する際は、土地や機械など、すべてをゼロから準備しなくてはならない。こういった現状から、「第三者継承」という仕組みが注目されている。これは、後継ぎのいない農家に、新たに農業を始めたいという若者を、市町村ごとにある就農支援機関が中心となってマッ

チングし、研修生として経験を積みながら、やがて経営を譲渡していくというものだ(青山 2009: 42)。この第三者継承のように、離農する農家のノウハウや施設を若い農家に受け継げるようにする仕組みを積極的に導入していくことが必要である。

農業に関心を持ち、農家を志す若者をバックアップする体制はもちろん必要だが、それ以前に農家になりたいと思う若者が今は少なくなっているのではないかと思う。私自身、農業はもうからないし、農家はどこも大変だから、と自分になりたい職業のなかから農業をいつのまにか排除してしまっていたことに気づく。農業というと、「もうからない」「大変」といった負のイメージを持っている若者は、私だけではなく多くがそうだろう。農業の負の面ばかりを伝えてしまうくらいが今の日本社会にはあるように思う。この状態が続けば、意欲的に農家になりたいと思う若者は減っていく一方である。だから、実際に日本の農業が置かれている厳しい現状を伝えるだけでなく、その楽しさややりがいをもっと伝えていけるように社会が変わっていかなければならない。

そのために、私は学校で生徒たちが農業により関心をもつように、そしてより積極的に農業にかかわっていけるようなカリキュラムを組むことを提案する。たとえば、小学校において田植え・稲刈り体験などをしたという人は多い。しかし、中学以降となるとそういった体験をする学校は少ないのではないだろうか。中学、高校、そして大学においても学生が農業体験をできる機会を増やすべきだと考える。そうすることで、農家の人とじかに話すことができ、農業への一種の抵抗のようなものがなくなるかもしれない。進路を考えるようになる中学校以降でこそ農業体験が必要となってくるのではないか。これにより、農業をしたいという若者が増える、とまではいかなくとも、農業を自分の職業の選択肢の一つにする若者が増えると私は考える。

4.3 ハケ山酪農場を訪ねて

話がハケ山を飛び出してしまったので、最後はハケ山酪農場に関して述べたい。今後の不安を語る中で、Eさんはこうも言っていた。「仲間がいなければやっていけない」。この言葉が私にはとても大事なことにように感じた。その仲間とは、牛乳を飲む人をはじめ、牛乳を売る人、牛乳を加工する人、牛乳を運ぶ人、獣医さん、牛乳に関わるすべての人のことを指す。確かに、その人たちがいてくれるから酪農という仕事を続けることができる。だがもうひとつ、ハケ山酪農場には、そこでともに酪農を続けている仲間がいる。同じ場所で、同じ苦労を分かち合える仲間が集まっているということを忘れてはいけないと思う。現場を訪れたのは一度だけで、酪農のことを何もわかっていない私が言うのは大変おこがましいとは思ふ。だが、今こそハケ山の仲間とのつながりとチームワークを強め、ともに困難に立ち向かっていこうとする姿勢が必要であるように感じた。

5. おわりに

僕自身、今回の調査で日本の農業、特に酪農について考えるよい機会となりました。私たちにとって最も身近な「食」を支えている日本の農業、それに携わる方々の生の声を聞くという貴重な経験をさせていただきました。まずは詳しくお話をしてくださったハヶ山酪農場の方に感謝をしたいと思います。

今回の調査実習で初めて珠洲に行ったのですが、地域住民の方の人柄にとっても居心地の良さを感じ、調査自体を楽しく進めることができました。末筆で恐縮ではありますが、この場を借りて、お礼を申し上げます。ありがとうございました。